

1年生に起業家精神育む-卒業後進路の選択肢拡大へ

慶應義塾大学薬学部

08面



グループワークでは隣席の学生同士でテーマについて話し合った

慶應義塾大学は今年度から、薬学部薬科学科1年生を対象とするアントレプレナーシップ（起業家精神）の導入に関する講義を開始した。薬学部訪問教授を務めるリバナス代表取締役社長の井上浄氏による事業で、ベンチャー起業家による講義を通して起業のやりがいや苦労などを伝えるほか、グループワークで学生が課題発見と解決に取り組むことにより、主体性を身につけさせることや就職の視野と選択肢を広げたい考えだ。

バイオ医薬品など創薬分野でベンチャーが担う役割と存在感が増し続けている中、同事業ではアントレプレナーシップの意味を起業に限定せず、「社会課題を見つけて解決するため、常に挑戦し続ける精神」と位置づける。起業家による講義や参加学生間のグループワーク等を通じ、アントレプレナーシップに対する理解を深めることを狙いとしている。

同事業は、井上氏が先端薬学教授を務める熊本大学薬学部で2017年に開始したもの。昨年8月の日本薬学教育学会大会で成果報告した際、慶大で研究連携推進本部長を務める長谷耕二薬学部教授が関心を持ち、2校目として実施することとなった。

1年生を対象とする目的について、井上氏は「キャリアに対する固定観念ができる前に選択肢を作ることが大事」と強調する。事業の成果見通しとしては、「在学中に外部との接触や他のコミュニティに入る人が増え、就職の際に進路が従来とは明確に異なってくるのではないか。医療系学部では、医学部に比べて薬学部発ベンチャーが少ないため、堅い組織に就くイメージを変えていければ」としている。

今年度は、5～6月にかけて計4回実施することとし、5月14日に開かれた初回は、01年にリバナスを創業した自らの経験を踏まえ、井上氏が導入講義を前半に行った。

東京薬科大学大学院薬学研究博士課程在学中に「世界一面白い研究所で世界初を」とした理想を実現するため、理工系大学生等と共に同社を立ち上げた経緯や子供への科学教育、研究開発、M&AやIPO（新規上場株式）と、「科学技術が生まれてから社会実装されるまでの場作り」を事業としていることを説明。

井上氏は「職業は創れることを頭に入れてほしい。研究成果の社会実装は自分でやるしかなく、言われたことだけやる人間にならず、主体的に動いてほしい」と訴えた。

昨年度時点での慶大発ベンチャーは291社と私立大学で最多で、国公立大学を含めて2番目の多さという利点の活用も強調。「研究室でも良いので扉を叩いて学んでみれば、相当刺激的な学生生活になるのではないかと提案した。



井上氏による導入講義

自分で課題見つけ、解決する

後半では、与えられた課題について隣席の学生同士で話し合うグループワークが、薬学部薬剤学助教でbacterico代表取締役でもある菅沼名津季氏による「会社員が起業するまで」をテーマとする講義内容と合わせる形で行われた。

菅沼氏は、自らの成長過程で人体の仕組みから「予防」に関心を持ち、一人ひとりに最適な食品や医薬品を開発して健康に貢献するため、大手食品メーカーに就職したが、腸内細菌の個別最適化に注力するという目的達成の手段として起業に至った。

菅沼氏の成長過程に関する説明に合わせ、「将来の夢」「大学でやりたいこと」「挑戦したこと」「今、疑問に思っていること」といったテーマが示され、学生間で話し合った。最後に、9マスの用紙に自分が興味のあるテーマを8マス分書き出した上で、9マス目に方向性を示し、隣席の学生に方向性を説明した。

グループワークの狙いについて、長谷氏は「これまでは与えられた課題を打ち返すばかりだったが、自分で課題を見出し、解決するメンタリティを養うことが理想」と語る。2回目以降、方向性に対する課題とアクションをまとめた上で、最終回でグループで発表することとしている。

初回に参加した久保田知誉さんは、「他の講義と毛色が異なり、話も巻き込まれるような面白さだった。研究を学んだ先にどう社会に貢献できるか方向性を知らなかったのが、刺激になった」と語った。

聴講生として傍聴した4年生の長谷川敬章さんは、「知らなかったことを知ることができて進路選択の幅が広がるので、社会におけるイノベーションにつながる」と話している。社会課題の解決に向けた事業立ち上げを目指し、高齢者のQOL向上につながる「若返り薬」の開発を将来目標に据えており、「起業は手段として、研究の倫理観、社会に対する献身性を持って生きていきたい」と語った。

井上氏は、学部学科や大学にとらわれず事業展開を図りたいとし、「複数の大学と実施を検討しているが、ベンチャー関係者との調整等も必要なため、詳細を詰めていきたい」との考えを示した。